里短歌会　1月詠草

吹かれつつ誰待つとなく野に佇てば明日の日和を告ぐる夕映え　岡本　トシ
門松に飾りさまざま加えつつあの子この子の佳き年願う　上田　安代
新たなる光ふらせよふりそそげ派遣村という名の村に　宮本　淑子
出荷すと納屋に積まれしトルコ桔梗むらさき深く新春を飾らむ　松本　幾代
冬陽浴み畑の野菜健気なり短か日きはまる今日は冬至　安見　朱實
訪ね来て乃木希典の像の前明治の声の耳朶に響けり　園田トミ子
飛びカンナの紋様しるき小鹿田焼白和え盛らむと小鉢購ふ　松岡　節子
一合の米を研ぎ終へ新聞の老いし夫婦の写真に見入る　川口　敦子
開拓者の生命守り七十余年貯水タンクに銃弾の痕　林　淑子
鈍色の空静もりて里山の木々さむざむと不況風吹く　山城　雅子

万句の里俳句会　12月句会

参拝の鈴の音高し冬麗　岩木　敬治
庖丁に身を乗せ冬至南瓜切る　打出　貞
句の縁出逢ひの増えてゆく賀状　隈部　輝子
一人居の句集ひもとく日向ぼこ　田島　房子
師走てふ大きなものに押されけり　北村　妙子
日輪を濡らしてをりぬ冬の霧　平山　邦子
落葉ふむ名残りの彩を惜しみつつ　宮本　雅子
旅からの夫の土産はうるめ干　林　まつ子
大空の深きに抱かれ山眠る　冨田　幸子
冬木立風の音さへなかりけり　松永　久子
湯の里に繋ぐ万句の納め句座　中路　郁子
冬木の芽紅をふくみて力あり　田中ひさ子

肥後狂句桜会　例会入選句集より

霜の朝　外でアロエはご臨終　光堀　善教
霜の朝　機関車のごつ吐かす息　窪田　明徳
霜の朝　よか白菜の育ちよる　田尻　浩風
新婚家庭　晩な碁打ちにゃ行きなすな　須藤　新生
新婚家庭　ハミングの出る台所　小川　繁美
新婚家庭　明日に回す後仕舞い　高倉　新米
おとぎ話　アニメに子供おっとられ　狩野　本六
大地震　損保会社も破産する　田中　孝幸
中退して　親の望みもうっぱずれ　藤野　清子
中退して　自分探しの座禅組む　高木　房惠
神経質　細めに立てる予定表　田中レイ子
神経質　マイ箸カップ持参さす　上村　〇子

泗水短歌会　12月詠草

芒穂の白波揺るる原も良し阿蘇野に曳かれ久住まで駆く　大島　きと
朝風の頬に冷たし庭前の田ん圃は昔麦畑だった　宮本　峯子
寿の朱の文字四方にのばしつつ嫁の腹帯丁寧に干す　吉安　永子
根子岳の麓の蕎麦屋に久に会ふ亡き父に似て来る義弟　増田久美子
屋敷うちちぎり残しのしぶ柿は真っ赤に熟れてひよどり遊ぶ　内田つね代
早ばやと釣瓶おとしの陽は沈み障子を締めて厨に佇てり　福原美智子
枝しなり鈴成りの柿陽に映ゆる柿ェ門なせし柿色なるか　高藤タツノ
新藁の匂い清しき注連縄付けて右の祠の新年支度　中山　定子
宝くじ三億円に賑わいぬデイケア一日皆若かわかし　長尾はるみ

せせらぎ俳句会　12月例会

春の仕度ひそかにありぬ庭の木々　村山　数恵
陽の匂ひ丸ごと吸ひて干布団　五丁　義昭
振り仰ぐ立田の山の遠紅葉　渡辺　白魚
それぞれに枯れゆく草も美しき　渡辺ふみ子
闇汁の煮音も聞けぬ納め句座　寺本　和子
句友老ひ闇汁会もお流れに　藤本アツ子
今年また遅れ勝ちなる年用意　服部　静子
補聴器を見せ合ひてより歳暮受く　坂本まつえ
「よい年を」と診断書に添へ賜りし　藤本　邦治
若鴉の美少年めき訪れし　内村　泊虹
電飾を脱ぎ塔眠る冬の街　渡辺満喜子
北風が服吹き抜けて肌に凍む　（中三）渡辺大寿
そろそろと整理整頓冬休み　（中三）渡辺一史

肥後狂句水笑会　12月例会

おでん鍋　続けて食べてもう飽いた　御手洗三代
おでん鍋　いつもの顔の寄って来る　吉岡　三水
なんとかなる　媽がヘソクリしとるふう　井手　水光
冬到来　やっと日の目を見るミンク　神尾　迫水
大掃除　へそくりゃ早う取っとこう　柏原　乗仏
火事ばいた　我が家も国も火の車　続　義昭
冬到来　目張りもせなんすきま風　中島　五女
なんとかなる　そぎゃん言うとは総理だけ　宮上　美由
おでん鍋　今夜もまあたおでんかい　平井　江彩
火事ばいた　ぬくもったなら逃げなっせ　山隈　好茶

七城短歌会　12月詠草

庭の樫枝切る鋏の手がとまる役目遂げたる蝉がらありて　緒方　寛子
パッチワークでポーチを作る楽しさよ日がな一日飽く事もなく　堀　甲子
川越しの神社の銀杏が黄葉なす伝え聞きゐし麦播き適期を　木下　陽子
梢になる太めの甘柿捥ぎたくて爪立ち伸ばすもじきが揺れる　岩津　涼子
吾余生守り給えと樹に向かい両手合わせて只管祈る　松岡ミチエ
戸を閉むると来れば見とれる夕あかねまなかう家並み影絵の如し　吉間　充子
難聴の兆しかこの頃鳴く蝉の耳に宿りて逃げ去らぬなり　森　道子
生きている事は幸せ寄せる波世界に続くここは天草　高木　精
土に還えること本望かは我知らず吹き溜まる落ち葉庭隅離れぬ　下川　つぎ
若さとは花までの命庭山茶花見つめいる時散るがくちをし　斉藤　芳子

旭志文芸俳句会　12月詠草

柿落葉掃きし後から又はらり　出田みとり
霜月や賀状書く季の早々と　東　芳子
陽の透かし落葉時雨や渓ふかし　芹川のり子
銀杏の一片ひとひら舞って散る　郷　ミヤ子
羊腸路往く奥阿蘇野枯れ芒　芹川　容子
山茶花の咲き初めたるや夕時雨　水谷　ミネ
渡り鳥幾千群れて空覆う（アトリ）　中尾ヨシコ